

これから始まるのは、
わたしたちの町、
檜葉町の物語です

檜葉町で採掘された石炭

東洋や海運など、植物が大量に燃焼しやすい環境が海の中に生まれ、長い年月をかけて生成されるのが植物の化石・石炭である。石炭は「燃える石」とも呼ばれ、化石燃料の一つとして使われてきた。近年、温室効果ガスである二酸化炭素(CO₂)を大量に排出することから、環境に悪影響を及ぼす資源として認識されてきたが、現在でもエネルギー資源であり続けている。

日本における石炭は、江戸時代末期に採掘され、明治時代以降、近代産業の発展とともに、エネルギー資源として需要が高まり、日本の近代化や戦後の復興を図るうえで貴重な国家資源として重要な役割を果たしてきた。しかし、石炭や天然ガスをはじめとする化石燃料やエネルギー由来の原子力など、ほかのエネルギー資源の枯渇により需要は低下し続け、現在は火力発電所など、一部の産業でのみ使用されている。採掘における石炭産業は、環境に悪影響を及ぼす中、竜田岡村をそれぞれ年間約2万1千トンとされ、天海製炭である南東地方へ輸送されたが、昭和30年代(1955~1965年)には、新緑産炭となり定産が開始されていった。

